

平城宮の宝幢遺構

宮廷では国家的儀式に際して、宮殿全体や殿舎を装飾した。『延喜式』(延長5年・927)によると、儀式には大・中・小の区別があり、それに応じて宝幢や各種の繖幡旗を立て、殿舎には斑幕などを飾った(表5)。宝幢とは元日や即位(大儀)に、大極殿の南15丈4尺に立てる日像・月像など7基の幢のことである。同書卷49「兵庫寮」に、「凡元日及即位構建寶幢等者。預録色目移送兵部。前十五日復請夫單廿人。(略)待官符到。寮與木工寮。共建幢柱管於大極殿前庭龍尾道上。前一日率内匠寮工一人。鼓吹戸卅人。構建寶幢。從殿中階南去十五丈四尺建烏像幢。左日像幢。次朱雀旗。次青龍旗。旗當殿東頭。玄武旗當西頭。右月像幢。次白虎旗。次玄武旗。相去各二丈許。與青龍。白虎同樓南端也。平頭。訖並返納。」とある。その起源は藤原宮にある。『続日本紀』大宝元年(701)1月乙亥朔条に「天皇御大極殿受朝。其儀、於正門樹烏形幢、左日像青龍朱雀幡、右月像玄武白虎幡。蕃夷使者陳列左右。文物之儀。於是備矣。」とあり、『延喜式』と大宝元年条では幡の青龍と朱雀、白虎と玄武が左右入れ換わる。

宝幢の周囲には繖と幡、小幡などを多数立てた。『延喜式』では大極殿南階・龍尾道下などに繖幡4種8本、隊幡2種16本、小幡84~196本とあり、その鋪設位置は大極殿南階、龍尾道下の他に会昌門外、応天門外、朱雀門外などがある(表6)。『宮衛令集解』元日条に引く『古記』には、元日の鋪設として「五繖」がみえる。『古記』の成立は天平10年(738)頃であり、奈良時代前半に遡る可能性がある(『平城報告XIV』1993)。

平城宮第二次大極殿前庭には宝幢遺構がある。発見は1983年夏のこと。宝幢周囲には幢幡遺構が多数あり、これはさらに大極殿南門前、朝庭の大嘗宮跡や朝堂院南門(会昌門)南などにもおよぶ(前掲書他)。

大極殿前庭の宝幢跡には前後2時期分(SX11260他とSX11255他)があり、これらを囲む幢幡遺構を含めて5本柱式、3本柱式、1本柱式の3型式があって幢幡の違いにより樹立方法・位置に違いがある。5本柱式は幢竿の四方に脇柱を設けるもの、3本柱式は幢竿左右に脇柱があるもの、1本柱式は幢竿を単独で立てるものである。

このうち、大極殿前庭部の宝幢は3本柱式である。特

表5 『延喜式』にみる大儀・中儀・小儀

I	(大儀)	繖・鉦鼓・幡	元日・即位・受蕃国使表
II	(中儀)	幡のみ	元日宴会・1/7宴・1/17宴・新嘗会・饗賜蕃客
III	(小儀)	なし	告朔・上卯日・臨軒授位・任官・1/16宴他・出雲国造・冊命皇后・冊命皇太子・遣唐使賜節刀等

表6 『延喜式』にみる幢幡の位置(大儀・元日)

北殿門	小幡	18×2	兵衛府(巻47)
大極殿南階	龍像繖幡	1×2=2	近衛府(巻45)
	兕像繖幡	2×1=2	中務省(巻12)
	鷹像隊幡	8×2=16	(近衛4×2=8、衛門2×2=4)
	小幡	42×2=84	近衛府(巻45)
龍尾道下*	虎像繖幡	1×2=2	兵衛府(巻47)
	熊像幡	4×2=8	兵衛府(巻47)
	小幡	96×2=192	兵衛府(巻47)
龍尾道以南諸門	小幡	4×4×2=32?	兵衛府(巻47)
会昌門外	鷲像繖幡	1×2=2	衛門府(巻46)
	鷹像隊幡	2×2=4	衛門府(巻46)
	小幡	49×2=98	衛門府(巻46)
応天門外**	隊幡	2×2=4	衛門府(巻46)
	小幡	45×2=90	衛門府(巻46)
朱雀門外	隊幡	2×2=4	衛門府(巻46)
	小幡	48×2=96	衛門府(巻46)
蕃客朝拜:	龍尾道下の隊幡等は倍増し、「応天門内」が加わる。		近衛府(巻45)
*龍尾道下	虎像繖幡	1×4=4	衛門府(巻46)
	熊像幡	4×4=16	近衛府(巻45)
	小幡	96×4=384	近衛府(巻45)
**応天門内	鷲像繖幡	1×2=2	衛門府(巻46)
	鷹像隊幡	2×2=4	衛門府(巻46)
	小幡	49×2=98	衛門府(巻46)

に7基分が想定できる後期のSX11255他は、掘形などの特徴が、長岡宮宝幢跡(1997年発見)とも共通する。

即位儀礼研究の必須史料である『文安御即位調度之図』(文安元年・1444)は宝幢だけでなく、繖幡、隊幡の一部も3本柱式に描く。しかし、大極殿南階の周辺や大嘗宮、会昌門南など平城宮例では繖幡、隊幡、小幡推定遺構はいずれも1本柱式であり、調度図の姿は後の変質と思う。

平城宮の宝幢遺構で目下の課題は5本柱式である。検出遺構は大極殿の東北と西北隅(SX9151・9168)であるが、本来は大極殿の四隅にあって大極殿を荘厳したのであろう。これについては仏教儀式と関わるかという(吉川真司「長岡宮時代の朝廷儀礼―宝幢遺構からの考察―」『向日市埋蔵文化財センター年報 都城10』201-217頁 1999)。この是非を問う的確な絵画史料はないが、幢幡は仏教の象徴ともいい(『続日本紀』霊龜2年5月15日詔)、『日本霊異記』にも法華寺の幢幡説話がある。寺院史料の内、『興福寺史料』「宝字記」には幡竿が回廊四隅にあるとの記録がみえる。仮にそうなら、大極殿での仏教儀式との関わりを考えるべきであろうか。

平城宮第二次大極殿院の宝幢関連遺構群は重複が少なく、数なども多くはない。これは宝幢や繖、小幡遺構の出現が奈良時代の後半か末葉に下ることを示唆する。

宮廷儀式の復元にとって『貞観儀式』(貞観13年・871頃)、『延喜式』は欠かせない史料であるが、両書が描く儀式像はあくまでも平安期のそれであり、その内容が無批判に奈良時代の初期にまで遡らせることは、慎むべきことと思う。

(金子裕之)